

福山市鞆の浦に現存する波止の尺間単位に関する研究

—大波止・玉津島波止・明神波止を対象に—

日本大学 正会員 ○西塚 泰道
 鞆まちづくり工房 非会員 松居 敏雄
 日本大学 正会員 伊東 孝

1. はじめに

広島県福山市鞆の浦には、江戸期に築造された3つの波止が残る（大波止、明神波止、玉津島波止）。それらに関する古文書も一部残っており、構造物の寸法を知ることができる。だが、構造物の大きさを「一間＝6尺」で換算すると、現存する規模と古文書に書かれている値に違いがある。この問題について触れた歴史書は見当たらない。

また、玉津島波止を除く波止以外は、今日までに手が加えられているが、大石などの存在から基本的な長さは変わっていないとみなすことができる。

そこで本研究では、古文書および波止の長さの測定値の比較を通して、用いられた尺間の単位について考察するものである。

2. 測量調査

測量調査は、2004年8月2日～12日および2005年2月19日におこなった。2004年の調査では、波止の長さ・横断測量・縦断測量をおこなった。横断測量は、波止法面の途中まで砂が堆積していたり、海水に浸っていたりして測定が困難だったため、測定可能な箇所でおこなった。2005年の調査は、波止の長さの補充調査をおこなった。

3. 波止の寸法

（1）大波止の寸法

大波止と明神波止は1791年、児島栄五郎によって築かれた。しかし波浪によって損壊（正確な年は不明）、1811年、名工として知られる工楽松右衛門が修増築した。

大波止の寸法は、明神波止の寸法とともに『鞆津申渡并書上類』（1791年、福山藩主阿部家文書）に記載されているが、これは工楽松右衛門の修増築する前の文書である。そこでここでは、文化年間（1804年～1818年）に描かれたとされる『文化絵図』とキーワード 鞆の浦 波止 尺間単位

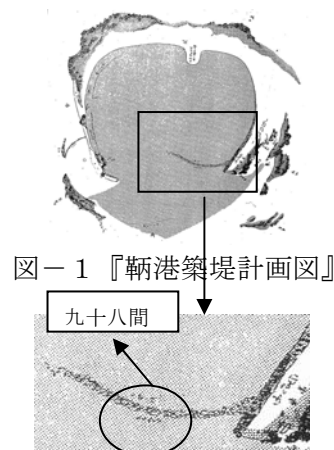


図-1 『鞆港築堤計画図』

図-2 『鞆港築堤計画図』の大波止の部分
 楽松右衛門が作成したとされる『鞆港築堤計画図』に着目した（1811年。原図は確認できなかったため『港湾』（第六巻第十号 1928年）の掲載図を利用、図-1）。しかし、古文書によって寸法が異なっている。

『文化絵図』には、大波止の先端側に、「長さ百廿間」と添え書きされている。また『鞆港築堤計画図』には、大波止の中央のそばに「九十八間」と判読できる文字が書かれている（図-2）。

以上から、120間、98間の寸法が得られる。

（2）明神波止の寸法

明神波止の寸法は、『鞆津申渡并書上類』の中に、藩への波止築造願い出および児島栄五郎が作成した見積書内に書かれている。波止の築造願い出は、原文を読み下し文にして以下のように示す。ここでは波止の長さに着目する。

余分の物入りには御座候えども、要害御番所下より五拾間、淀姫下より式拾間程の築き出しを仰せに付けられ候はば、入船は数拾艘御座候て、先年に相替わらず繁昌の地にも相成り申すべく候哉と相聞こえし申し候・・・

上記の「要害御番所下より五拾間」は大波止、「淀姫下より式拾間」は明神波止のことである。これら

から明神波止は、20 間で願い出されていることがわかる。また、このあとの文をみると、築造願い出は認可されが、輦の願い出よりも波止の長さは短いものだったようである。そして児島栄五郎により見積書が作成された。一部を以下に示す。

銀八貫貳百貳拾五匁也

右者波戸捨石

長拾間 巾拾間 同高サ壹間 同長サ拾間 根巾六間

同上之築留三間

高サ三間

しかし、上記の見積書では、波止のどの部分をさしているのか不明な点があるが、波止の長さとして、10 間と 3 間の値が示されている。

以上から 20 間、10 間、3 間の寸法を取り上げた。

3) 玉津島波止の寸法

1847 年に柴田宗右衛門が完成させた。寸法は、地元中村家に伝わっていた『斎家録』(1874 年)に掲載されている。『斎家録』には以下の内容が記載されている。波止の長さに着目すると「総長八十一間」と記載されている。以下に示す。

玉津島新波戸 平均坪敷千二百坪 総長八十一間・・・

以上から、大波止は 120 間と 98 間、明神波止は 20 間・10 間・3 間、玉津島波止は 81 間の寸法が得られた。そこで、以下にそれらの寸法を 6 尺換算したものと測定値とで比較してみる。

4. 波止の寸法の比較

(1) 大波止

表－1 は一間を 6 尺換算した値で、測定値は 146.476m である。測定値と換算値を比較すると、現状とは一致していないことがわかる。

(2) 明神波止

測定値は 30.57m である。『輦津申渡并書上類』からは、20 間、10 間、3 間の寸法が考えられる。それぞれ一間を 6 尺換算で測定値と比較すると、それぞれ 36.362m、18.181m、5.454m となる。測定値と全く異なる。

(3) 玉津島波止

玉津島波止の測定値は 145.879m である。『斎家録』の「総長八十一間」を 6 尺換算すると 147m になり、測定値とほぼ同じである。ゆえに、換算値は「一間＝6 尺」に合う。

大波止と明神波止の長さの違いは何故生じたのだ

ろうか。

一間が 6 尺に統一されたのは、明治 8 年 (1875) に公布された度量衡取締条例からであり、それ以前は一間の長さは地域や現場によって違いがみられた。そこで以下では、一間自体の長さを検討する。

5. 大波止・明神波止の換算値

換算結果は、98 間の場合 1.494m になり、一間＝1.5m＝5 尺になる。120 間だと、1.220m となり 4 尺になる。

明神波止は、測定値を 20 間で割ると換算値は 1.528m になり、「一間＝5 尺」に近い。10 間では 3.057m になり、一間が 10 尺、3 間では 10.19m になり、一間が 33 尺になる。

博物館などで現場の一間尺の基準モノサシをみると、6 尺前後のモノサシは見られても、「一間＝4 尺」というのは見られない。また一間が 10 尺や 33 尺も考えられないので、ここでは、2 つの波止の尺間単位は「一間＝5 尺」が妥当とみなした。明神波止の建設は 1791 年、大波止は 1811 年と、建造年代が近いことも 2 つの波止の尺間単位を統一できる理由とみなした。

6. おわりに

今回は、現存する構造物と古文書との値から少なくとも異なる尺間単位があることを推測した。本稿ではそれを、「一間＝5 尺」と「一間＝6 尺」と推定した。

1) 現場の一間尺の基準モノサシは長さが違うとはいえ 6 尺前後なので、大波止および明神波止は「一間＝5 尺」とみなした。また両波止の建造年代が近いことも考慮した。

2) 玉津島波止は、今日と同じ「一間＝6 尺」である。玉津島波止が築かれた前後から輦地区では「一間＝6 尺」単位が用いられたと考えた。

今回の研究は、推論の域を出ていないので、今後データをさらに収集することによって、詳細を検討したい。

表－1 大波止の延長＜一間・6 尺換算値＞

資料	間	換算値
『文化絵図』	百二廿間	218.172m
『輦津申渡并書上類』	九十八間	178.173m

＜参考文献＞

・福山市教育委員会『輦の浦の歴史福山市輦まちの伝統的町並みに関する調査研究報告 I』福山市教育委員会 1999